

「満洲」と小樽高等商業学校」へのレファランス¹⁾

阿部 安成

滋賀県の彦根からまいりました阿部安成と申します。どうぞ、よろしく願いいたします。これまでわたしは、小樽高等商業学校（以下、高等商業学校の名称は、小樽高商、のように略記する）の史料調査のために小樽に4回来ています。12月、3月、9月、そして1月から2月にかけて、と冬が多く、観光によいという夏に来たのはたった1回だけ、それも夏も終ろうというころの季節でした。わたしはスキーをもう何十年もしていませんので、いかにきちんと調査に来ていたかがわかるとおもいます。

小樽と彦根には、そこにある国立大学法人のどちらもが、その母体を高等商業学校としているという共通性があります。もう1つ共通する点に、どちらにも大量の水がある、との環境があります。小樽には石狩湾が、彦根には日本一の大きさの琵琶湖があります。ただ、一方は海水、一方は淡水という違いがあります。小樽のキャンパスからは眼下に海をみおろせますが、彦根のキャンパスは淡海とそうかわらない高さにあり、ここ小樽キャンパスからの眺めとはずいぶん異なります。また、湾とはいえ石狩の海は、閉じた湖とくらべると、やはり大きな広がりを感じられます。そうした違いがありながら、彦根からはるばる小樽にやってくると、圧倒される量の水をまえにして、なにか似たようなようすがあると感じ、それがなにかずっと気になっていました。まえに小樽から帰るさいに函館をまわったとき、それに気づきました。海のちかくながら、小樽では潮の匂いを感じなかったのです。それは淡水の琵琶湖と同じでした。

函館で、函館山のまわりをぐるっと歩いているときに、ふと潮の匂いがして、その瞬間

¹⁾ 本稿は2010年度滋賀大学教育研究プロジェクトセンター「20世紀前期日本の高等商業学校スタディーズ・プロジェクト」の1つであり、また2010年8月8日・9日に小樽商科大学で開催された旧植民地関係資料ワークショップ+小樽商科大学史料展示室オープン記念講演会「小樽商科大学の歴史へタイムスリップ」での報告原稿に加筆修正したものである。報告にあたって小樽商科大学附属図書館学術情報課情報整理系の平井孝典さんにお世話になった。ありがとうございました。

に、ああ小樽ではこの匂いを感じなかった、と気づいたのでした。ただ、函館では風のとても強い日に歩いていたので、潮を感じたのはそのせいかもしれません。このことを、小樽の平井さんだったか、彦根の同僚だったかに話したところ、小樽でも場所や日によっては潮の匂いがするときがある、と教えられました。潮が匂うかどうかは絶対のものではないのでしょ。

わたしたちは、遠くの場所へでかけたときに、ふだんの生活の場と対比をして、その出先の場所がどのようなところなのかを見定めて理解をし、また、生活の場をあらためて確認するという作業を、そうはっきりと意識することなくおこなっています。それは2つの場の対比にかぎられず、さきに示した例のように、彦根、小樽、函館といった3か所の、あるいはそれ以上の複数の地点での対比がなされるばあいもあります。きょうのわたしの報告は、この複数の場所での対比、認識、理解、が論点となります。

少し論題にちかづけたことを話しましょう。このところ、依然として、「満洲ブーム」がある、といわれます。たとえば、新潮社から出た『日本鉄道旅行地図帳 歴史編成 満洲・樺太』(2009年)という時刻表と地図がいっしょになった新潮「旅」ムックの1冊が、とてもよく売れているといえます。また、たんなる出版ブームとかたづけられない近年の動向に、「満洲研究」が精緻、緻密な進展を遂げているとの観もあります。それを示す作品を3冊だけあげると、坂部晶子さんの『「満洲」経験の社会学 - 植民地の記憶のかたち』(世界思想社、2008年)²⁾、安富歩さんたちの『「満洲」の成立 - 森林の消尽と近代空間の形成』(名古屋大学出版会、2009年)、蘭信三さんが編集した『中国残留日本人という経験 - 「満洲」と日本を問い続けて』(勉誠出版、2009年)となります。

この3つの研究書を代表としてあらわれている「満洲研究」の緻密な進展を、わたしは、研究の 社会史化 とみています。ここにいう 社会史 とは、全体史であり身体史を展望する、そうした歴史認識であり、歴史叙述の方法です。また、わたしのいう 社会史

²⁾ 同書への批評は、阿部安成「多声のエスノグラフィを記述する試み - 坂部晶子『「満洲」経験の社会学』を読む」(滋賀大学経済学部Working Paper Series No.133、2010年6月)を参照。

とは、既存のスタイルを問い、そこからはみだしてゆく歴史学でもあります³⁾。

もとより、現在よりもまえに、とくに、「満洲」については、数多くのさまざまなドキュメンタリーやルポルタージュに体験記、また実証研究がありました。既存の(というとき、いつが、どの研究が劃期となるかを示す必要があるが、ここでは曖昧なままにしておく)作業と、近年の動向のあいだに位置する研究には、「満洲観光」を題材とした成果もあります。高媛さんの一連の研究がそれです⁴⁾。高さんの作品を、明確に近年の動向におかなかったわたしの批評には理由があります。それは、高さんの議論には、帝国日本の型というべき前提があって、「満洲観光」とあわせる事象を、その型にあてはめてゆくきらいがあるとみえるからです。これはかつて、国民国家論が登場してきたときにみられた、国民国家の型にみあういくつかの事例を列挙していった作業を想起させます(とはいえ、高さんの研究を否定するものではなく、「満洲」の「観光」が研究対象となりうることを示した意義が彼女の研究にはある)⁵⁾。

これまで知られてこなかった過去の事象を明らかにするとともに、それを考えるわたしたち自身の手立てをもあらためて考え直してみること わたしは、こうした往復の、あるいは循環の作業が歴史学には必要だと考えています。この点でこれまでの仕事とくらべると、近年の動向には、ただ研究対象とする事象を広げたにとどまらない、歴史認識の転換の試みがあるようにおもいます⁶⁾。

もういちど、観光、もしくはツーリズムという研究領域にふれておくと、文化人類学や社会学におけるこの領域のいわば開拓は、いまに始まったことではなく、これまでにいくえもの研究が蓄積されて久しいところとなっています⁷⁾。また、「満洲」と「観光」や「旅

³⁾ 阿部安成「社会史」(成田龍一ほか編『20世紀日本の思想』作品社、2002年)を参照。

⁴⁾ 高さんの最近の仕事としては、高媛「戦地から観光地へ」(『中国21』第29号、2008年3月)がある。

⁵⁾ この観点からの国民国家論批評は、阿部安成「「国民国家」という問い - 書評『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』を読む」(『立命館言語文化研究』第12巻第2号、2000年9月)を参照。

⁶⁾ ただしこれまでの「満洲」をめぐる著述にも、澤地久枝『もうひとつの満洲』(文芸春秋、1982年)のように自己認識と満洲における歴史との連結とその解きほぐしを展開した作品があった。

⁷⁾ たとえば、翻訳書ではない研究書として山下晋司『バリ 観光人類学のレッスン』(東京

行」が結びつくと、それは格好の話題となって人びとの耳目をひきつけると期待されることでしょう⁸⁾。ところが、20世紀前期に高等商業学校がおこなった朝鮮半島、中国大陸、台湾、満洲、あるいはロシア領への修学旅行は、ほとんど知られていませんでした。いや、知られてはいた、といった方が、より正確でしょうか。確かに、『小樽高商の人々』(小樽高商研究会編、小樽商科大学発行、2002年)も、小樽高商の海外修学旅行にふれてはいます。しかし、それはごくわずかの記述にすぎず、その行事あるいはカリキュラムが小樽高商の全体に位置づけられてはいませんでしたし、なによりその修学旅行でなにがあったのかは、ほとんど明らかにされていませんでした。格好な話題にはなる、ただ研究対象としてはちょっと……というところでしょうか。王道の、あるいは正統派歴史学からすれば、観光や旅行、ツーリズムなどは色物ということかもしれません。

ここで、迂遠な内容と聞こえるかもしれませんが、わたしにとっての高等商業学校研究について述べておきましょう。わたしの研究上の出自は、日本思想史のゼミナールとなります。ただし、わたしが大学院に進学したころ、指導教官はだんだんと自身の研究領域を民衆史ないし民衆思想研究から社会史に移しつつあるとの自覚を持っていたようにおもいます。わたしはそうした指導教官のもとで、民衆運動、都市祭典を素材とした研究を始めてゆきました。大学院生から助手まで9年のあいだの仕事には、アジア、教育、実学といった項目はほぼ皆無でした(もう1つ、経済、も)。

滋賀大学経済学部の専任教員となり、経済学部の施設である経済経営研究所調査資料室の業務を兼任したときから、わたしと高商研究とのつながりが出来始めました。先行研究を見渡してみると、高商研究にはその単独の専門研究者がほとんどいないといってよい状況でした。滋賀大学経済経営研究所(以下、研究所、と略記する)では、すでに1982年から1992年にかけて「旧植民地関係資料」の所蔵目録を地域別に5分冊で発行していました。

大学出版会)の刊行は1999年だった。

⁸⁾たとえば、2008年5月『朝日新聞』東京本社版夕刊での「漱石の満州」を歩く」全5回連載(19日~23日)には唐突な登場との感じをうけた(「漱石が旧満州を旅して来年で100年」だからということなのだろう)。漱石の満洲での足跡をたどり、「漱石のアジア観」を検証しようとするこの連載も「満洲ブーム」の一端をあらわしている。

「満蒙」「支那」「朝鮮」「台湾・南方・樺太」の区分と順で刊行されました（もう1冊は「補遺」）。この「旧植民地関係資料」の目録発行は、旧高商を母体とする国立大学法人経済学系学部（以下たんに、国立大学経済学部、とする）の資料所蔵機関における、共通した事業となりました。それぞれの資料所蔵機関で所蔵資料を広く公開しようとするとき、まず、高商時代に収集された図書の中から、当時同時代のアジア各地域で刊行された文献の台帳をつくったわけです。こうした目録はおそらくどこでも、それぞれの学部の専任教員ではなく、学部施設の事務スタッフが編集したはずです。滋賀であれば経済経営研究所、山口ならば東亜経済研究所、そして長崎は東南アジア研究所がこの目録づくりを担いました。理解ある教員がいたりいなかったり、学部において認知されたりされなかったり、とそれぞれの施設で事情は異なるでしょうが、おおむね、この「旧植民地関係資料」は学部内（大学内）よりも学外の利用者の方が多く、また学外者によって熱心に関覧され、活用されたとおもわれます。こうした事情があったのなら、目録づくりで「旧植民地関係資料」をめぐる業務は一段落ついたこととなり、そののちは、閲覧者が来たときに資料を提供すればよいだけで、資料業務の更新がおこなわれなくなってしまったことも止むを得なかった、といえるでしょう。

わたしが研究所の業務を担い始めた年度は、ちょうど科学研究費補助金研究成果公開促進費（データベース）が採択されたときで、その実施が調査資料室の当面の仕事となりました。そのころは補助金の採択率も高く、2002年度と2004年度の2回の助成によって所蔵資料のデジタル化をおこない、資料を収録したCD-Rを2セット（1枚と2枚組）づくり、研究所ホームページのデジタルアーカイブでも公開を始めました。デジタル化にさいしての資料選択は、「観光」と「案内」の観点を設けて朝鮮編31点、台湾・南洋編41点を選びました。すでにこのころには、学長裁量経費により所蔵資料のマイクロフィルム撮影もおこなっていたので、1980年代から1990年代にかけての目録づくりを経て、2000年代にはマイクロフィルム撮影とデジタル化を進め、所蔵資料の把握に始まり、その保存（撮影したマイクロフィルムによる代替保存）と公開（デジタル化したデータを公開して、資料はほぼ完全保管とする）の手立てを整備してきました。さらにもう1つ、所蔵資料の活用をめぐる

も、その 1 例として、朝鮮の観光にかかわる研究報告をおこない、それを論文として発表しました⁹⁾。研究所では、所蔵資料について、その保存、公開、活用を業務の指針としました。

研究所で所蔵資料の仕事をしてゆくなかで、だんだんと 1 つのことに気づいてゆきました。これまでほとんどの研究者たちは、中国をフィールドとするのであれ朝鮮や満洲の地域研究であれ、自分が必要とする歴史資料がある機関がどういう歴史のあるところなのかには十分に注意を払わず、ともかく資料がそこにあって閲覧できればよいのだという資料への向きあい方に慣れていて、それは、わたしの植民地観光についての仕事も同じだったということです。いうなれば、歴史資料の来歴と切れたところでの、その活用です。高商が収集した「旧植民地関係資料」はまるで金太郎飴のようにどこも同じようだ、といわれたことがありました。似たような資料があちこちの旧高商を母体とする国立大学経済学部にある、という調査によって得た一斑を全体とする先入観です。管中に豹を見る、というわけです。さきに述べた来歴無視の資料活用と、この金太郎飴先入観とが結びつくと、高商が収集した「旧植民地関係資料」をいまや関係するすべての国立大学経済学部で持っている必要はなく、どこかが代表して、またはどこかに集約しておけばよいという意見が、かんたんに出てくることとなります。現に、わたしたちの歴代研究所長のなかのひとり、そうした発言をしました。

しかしこれは、所蔵資料の来歴の無視にとどまらず、それぞれの高商の歴史を抹消してしまう危険性を孕んでいます。さきにみた高商研究において単独の専門研究者がまずいないことにくわえて、旧高商系の経済学部自体に母体としての高商に関心がないとなると、高商の資料がどんどん隅に追いやられ、ときに封じ込められてしまうこととなります¹⁰⁾。

⁹⁾ 研究報告は、アジア民衆史研究会 2003 年度大会「東アジアにおける民衆の世界観(3)」(2009 年 8 月 9 日、東京) 報告「植民地観光のなかのナショナリティ」、論文は、「植民地観光のなかのナショナリティ - 20 世紀初頭の朝鮮というフィールド」(『東アジアにおける民衆の世界観(3)』アジア民衆史研究第 9 集、2004 年 5 月)。

¹⁰⁾ ある国立大学経済学部では、その母体となった高商の生徒が執筆した卒業論文の閲覧を申請したところ、閲覧場所がない、資料が汚い、を理由に許可されなかったとの体験をした。

所蔵資料を把握し、その保存と公開と活用につとめるだけでなく、所蔵資料をいわば歴史化する^{すべ}術をくふうして、資料の意義を所蔵機関に教える必要がでてきました。そのためのわたしにとっての研究テーマが、高商の海外修学旅行でした¹¹⁾。それとともに、われわれが保存と公開と活用をはかる歴史資料を研究所が所蔵する「旧植民地関係資料」に限定することなく、彦根高商が作成したり刊行したりした文献もふくめ、また可能であれば、たとえば附属図書館（旧高商時代は図書課）が所蔵する図書などにも広げることも必要です。このときわたしたちは、「大学史関係資料」という歴史資料のまとまりをつくり、それをあつかう利用規則も決めました（2005年）。所蔵資料の配架は変えませんでした。仕事のうえでの資料の編成替えをしたこととなります。

高商があった時代には、公文書管理法のようなすべての高商やそのほかの高等教育機関を対象とする法律がありませんでしたから、したがって、高商の資料の残り方　そのぐあいや量もまちまちとなっています。歴史研究者は、可能なかぎり多くの資料をできれば永久に保存しろというだとか、自分の好みの資料だけ、自分が必要とする資料のみを残そうとするだとかいわれる、収集癖のある保存マニアだとみられているようです。わたしはそうしたことを述べたりおこなってきたりしてきていないつもりですが、現状をふまれば、高商の歴史資料についていえば、なにであれともかくすべて残すというくらいの意気込み、あるいは重点化が必須だといっておきます。

朝鮮半島、中国大陸、また、台湾やフィリピン、またはロシア領へと、教官と生徒が旅行をする修学のカリキュラムは、いくつかの高商で設けられていました。たとえば、「設立当時ノ教育綱領」の1つに「満韓経営」をあげる山口高商は¹²⁾、その地への修

11) こうした業務方針の推移については、阿部安成「旧制彦根高等商業学校というフィールド - 歴史の読み書きをレッスンする教室」(『図書』第698号、2007年5月)を参照。

12) 『山口高等商業学校大学予科一覧 自明治三十八年至明治三十九年』(山口大学経済学部東亜経済研究所所蔵)に折りたたんで挟み込まれた「山口高等商業学校」の縦罫線に「本校設立当時ノ教育綱領」が4項列挙されその第4が「満韓経営」だった。なおここにある「明治三十八年五月」はこれが記されたときの年月なのか、のちに「設立当時」を振り返ったときにそれがこの年月だったと記したのかよくわからない(文言からして後者か)。

学旅行をくりかえしおこなっていました。彦根高商、長崎高商、高岡高商でも、それは確認できます。彦根高商では、生徒たちの卒業後の「活躍」の場をあらかじめ在学時に視察しておくとの目的が修学旅行にありました。ただし、高商全体を見渡しても、修学旅行の歴史資料はごくわずかしが残っておらず（わかっておらず）、いまのところわたしは、彦根高商の文書しか確認していません。山口や長崎や小樽では、学内で編集発行された逐次刊行物にいくつかの記事や論稿をみたり、いわゆる卒業アルバムに数葉の写真をみたりするだけです。こうした歴史資料の残存状況にも由来して、高等商業学校の修学旅行については、まだ多くのことがわかっていません。

ほかよりはいくらか多く修学旅行の歴史資料が残っている彦根高商のようすをみると、修学旅行というフィールドは、引率する教員、修学の主役となる生徒、卒業生の同窓会組織、をつなぐ場となり、どのような研究や講義をおこなっている教員が引率者となったのか、生徒たちはなにを聞きなにをみてきたのか、外地にいつどのように同窓会支部が組織され、それがどのように機能していたのか、を知るきっかけとなります。また主役としての生徒を軸としてみると、その生徒は校内の研究会で活動していたかどうか、どういう調査報告や卒業論文を書いたのか、卒業後にどういう職業に就いたのか、またいったん就職のちに転職したことがあるかどうか、をたどることで、在学中の修学旅行という経験がなにをあらわしているのかを知る手がかりになると見通しています。

彦根では3年次の夏におこなわれる修学旅行で、長いときには1か月あまりにわたって、アジアの各地を巡遊していました。したがって費用も高額となり、年間の授業料が50円だったときに300円もかかった旅行になったといえます。修学旅行は、なかなか得がたい、稀有の機会でした。彦根ではだんだんと参加者も少なくなってゆきます。修学旅行は高商生にとってどのような経験となったのかと問おうとするとき、それが滅多にない機会であったがゆえに、後世のわたしたちは高商生の修学旅行という経験を過大視してしまうかもしれません。彦根の資料には、修学旅行での生徒の物見遊山の気分を危惧し、それを戒める教官の感想が記録されています。あるいは、修学旅行に参加したからといって、台湾や朝鮮についての卒業論文を書いたり、卒業後にそれらの地域で職に就くといったりする生

徒がたくさんいるわけでもありません。海外修学旅行というカリキュラムが、高商をうまくあいにも機動させる十分な装置になっていないのです。海外修学旅行をとおして、高商の諸機能が連結しづらいといってもよいでしょう。わたしはこうした事態を、脱臼と表現したことがあります¹³⁾。修学旅行の企図が完全に挫折したのではなく、どこかでつながっているとの解釈です。

さきに述べたとおり、高商の海外修学旅行にかかわる歴史資料は、断片の集積と云ってよい状況にあります。高商の海外修学旅行という主題を、そうした欠片の継ぎ接ぎによるおもしろい話の種をいどにとどめないようにするには、とにかくふうが必要となります。それが高商の結節としての海外修学旅行という観点で、教官、生徒、同窓会の結び目となる海外修学旅行、あるいは、生徒を軸として校内研究活動、生徒の調査報告や卒業論文、就職と転職といった高商の諸相をつなぐフィールドとしての海外修学旅行を考察するものです。

小樽高商にとっての海外修学旅行は、どのようなカリキュラムだったのでしょうか。おおまかにいうと、小樽高商では、3年生が海外へ、1、2年生が樺太をふくむ道内あるいは本州となっていました。とはいえこれは大雑把な区分で例外もありました。

「小樽高商第一回海外修学旅行」と報道された1913年の旅行では、まずウラジオストクへ渡り、その後、朝鮮の清津、元山、釜山とくだり、ついで、長崎、博多、下関、徳山、宮島、岡山、神戸、京都、名古屋、鎌倉、横須賀、横浜、そして東京で解散となる、7月11日から8月6日までの「大修学旅行」となりました。このとき引率教官2名を入れた一行は26名。「海に千三百余哩、陸に千六百余哩」とは『小樽新聞』の表現です。この海外修学旅行は、地元紙でじつに全45回の「環行三千哩」と題された連載として報じられました(9月12日～12月16日)¹⁴⁾。

¹³⁾ 日本移民学会ワークショップ(2005年12月、京都大学)での報告論題「彦根高商の修学旅行という経験」。

¹⁴⁾ 2006年9月の時点で小樽商科大学大学史料展示室にあったスクラップブック(表紙に「抜萃帖」と印刷され、また「スクラップ/(高商関係)/1」の手書きもみえる)にこの

このとき、出発にさいして渡辺龍聖小樽高商校長が述べた送辞では、
此旅行は卒業期の近い一行に取つて、「嫁入の見合に行く様なもの、将来の嫁入先に愛想を尽かさずか、其れとも気に入らるゝかを定むるに至るから、自重して呉れ」との事であつた。

との海外修学旅行の目的が示されていましたが、ただし、報道記事はつづけて、「気に入つたから貰ひたい」と惚込んだ婿殿の銀行なり会社なりが、有つたか無かつたかは結ぶの神より外に知らぬ」と記したのですから、この「^{すべきゆれいしよん}投機」がうまくいったのかどうかは、この報道からはわかりません。高等商業学校の行事に、「投機」との表現をあてる書きぶりはなかなかおもしろいとおもいます。思惑、やま、当てこみということですが、一方で、そのために必要な熟考や観察、あるいは、そこまでいたらず的を射ていない憶測や空理といった意味がspeculationにはあります。ともかく、事前に調査や確認をしたうえで、自分を張る試みが海外修学旅行にはあつた、とみられていたのです。

『小樽新聞』連載記事「環行三千哩」の最終回では、「明年行はれるべき第二回海外修学旅行」への提案が掲げられました。「今夏の経験に徴して、力めて処女地見学をお勧めして置きたい」ので、

浦塩斯徳より西伯利亞鉄道をニコライフスクに、次で東清、南満鉄道に移つて哈爾濱と大連と、なほ安奉線より京義、京釜線に依つて朝鮮を縦断する大規模の旅行計画を実現せられん事を望む。

との旅程の勧めです。「本国の旅程を短縮するも、何の遺憾がない」のだし、また、「西伯利亞、満洲、朝鮮の各鉄道」が5割から8割という割引をおこなっているのだから、その方が費用も安いというわけです。

翌1914年に実施された海外修学旅行について記した「修学旅行記」(『小樽高等商業学校校友会雑誌』第3号、1914年12月)に収録された「三年級海外旅行に就て」は、「当校では、毎年三年級生徒に、大旅行を課する事になつて居る」が、ただしその目的は「必ずしも其方面に、卒業生の発展を望むからではない」と、さきの校長送辞とは異なる言辞が明示さ

連載記事が貼つてあつた。なお『小樽新聞』は市立小樽図書館で閲覧した。

れています。

東京や大阪の様な、神戸、横浜の様な、大都会なり大商業地は、之れを知り、其の活動振は、之れを目撃して居ても、我が国の状態のみでは夫だ心元ない、比較して見る常識等は得られない。将来社会に立ち、大に活躍せんとする学生は、充分に世界を知り、之れを比較するだけの素養^(マ マ)をつくらねばならぬ。然ればとて、俄かに倫敦や、紐育に参るわけにも行かないから、是非とも地形を利用して不十分ながら外国的空気を吸ひ、其活動振を見聞する要がある。而て本校は御承知の通り浦塩を措いて他に求むる場所が一寸ないから、昨年と申し、今年と云ひ露領方面に志す様になつたので。

と、世界を知って比較の視点を持つこと、外国の空気にふれること、ここ小樽ではそのための最適地がウラジオストクであること、の主張です。山口高商や長崎高商にとってみぢかな海外が「満韓」であったとき、小樽高商のそれは「露領」のウラジオストクでした。

さて、高商生たちは、海外修学旅行の渡航先でなにをみて、なにを感じ、考えたのでしょうか。紋切型の1つの体験は、異質な「朝鮮」や「支那」をその汚臭や不潔などといった価値の低さとして実感するものです。これは複数の高商生にみられる共通した体験です。同じ日本であるにもかかわらず、内地にくらべると「朝鮮」は汚い、あるいは、日本と違っていまだ混沌としている「支那」だから怠惰で不潔だ、といったたぐいの記述をみつけることは、そうむつかしくありません。 「ニラを食つてると云ふ支那人は、全く絶えられぬやうな悪臭を発するので平口した」「広い鴨緑江を渡つて支那に入つてからは、詩的な白衣の姿も見へなくなり、紺色の汗みどろになつた服を着けた金即生活をモットとしてる支那人で埋まつて居ります、あの人達にもし強い団結力があつたならばどんなに恐ろしいことだらう」(「第参学年修学旅行記」『校友会雑誌』第11号、1918年12月)というぐあいです。

彼らの見聞はこうした貶視だけではありません。感嘆、興奮の声をあげるときがあります。それが、1つに戦跡に立ったとき、もう1つが「大陸」を実感したときです¹⁵⁾。

¹⁵⁾高商の海外修学旅行を考察するときの2つの論点としての戦跡と大陸については、阿部

ここでは、後者の「大陸」感についてみてゆきましょう。小樽にとってみぢかなウラジオストック 1914年の海外修学旅行では、7月4日に小樽港を出帆した一行がウラジオストックに着いたのは翌々日の6日でした。彼らは、「アムール湾の朝風」をうけ、「支那ヂヤンクの漕ぎ廻れる」ようすをみて、「欧風の峨々たる建築物の犇と立ち並べる」を仰ぎみるなかで、

初めて大陸を見た学生には、必ずや一種の感想を与へたに相違ない、此感想こそ旅行の徳とする処。

との、ウラジオストックで抱いた「大陸」感が記録されています（前掲「三年級海外旅行に就て」）。船がウラジオストックに着岸すると、

其時に得た埠頭の第一印象は僕を歐洲の真只中へほうり出して^{しまつた}。身が東洋の涯にあるとはどうしても考へられない。

との体感も記されています（「本科三年生修学旅行記」『校友会雑誌』第9号、1918年2月）。ウラジオストックという1地点から大陸の全体を眺めた気分になってしまうこの印象を、わたしは「鳥瞰図風体感」と呼ぼうとおもいます。小樽のある積丹半島もまた北海道のうちであり、道外からすると（道内においても）北海道は広大な大地とみられることがあります。そこから来た高商生たちは、確かに大陸であるユーラシアの東端のウラジオストックのその1地点にすぎない埠頭に立ち、遙かな大陸をそのころのなかに想い描いてしまうのです。しかもこの「大陸」感は、「東洋の涯」ではなく「歐洲の真只中」を一瞬のうちに遠望させて、そこに自分を立たせてしまう印象を与える力もあるのです。こうした心象風景は、1地点から見つめる対象の世界の全体を大きく湾曲させて画面に描き籠めてしまう、吉田初三郎の鳥瞰図と同じ構図だとわたしは考えます¹⁶⁾。この「鳥瞰図風体感」のいわば本場が、満洲なのです。

彦根や山口の高商生たちの海外修学旅行では、その多くが満洲に入るときに、朝鮮半島

安成「大陸に興奮する修学旅行 - 山口高等商業学校がゆく「満韓支」「鮮満支」」（『中国21』第29号、2008年3月）を参照。

¹⁶⁾ 吉田初三郎の鳥瞰図については、ひとまず、前掲阿部「植民地観光のなかのナショナルティ」を参照。

を鉄道で北上して新義州から鴨緑江を渡って安東へゆく旅程が組まれます。小樽高商の海外修学旅行は、そのいくつかが反対めぐりとなり、小樽からウラジオストクへ、そして満洲から朝鮮半島を南下するという旅程があります。小樽高商生たちは安東駅の構内で、

時針に赤と黒と二本の短針を有するものあり、聞けば満洲と朝鮮は標準に於て一時間内の差あれば、その区別を明かにするなりと

と知ることとなります(前掲「本科三年生修学旅行記」。以下とくにことわらない引用は同書から)。鴨緑江にかかる「東洋第一の鉄橋」を境にして時差があり、この境界は日本との国境でもあります。時差と長大な鉄橋によって満洲の出入りが実感されます。

異郷満洲　そこはまた、「平坦砥の如き満洲平野」です。満洲の高大さをあらかず形容は、「広大な満洲の原頭」「広漠な純満洲の雰囲気」「見渡す限りが高梁畑」「満洲の大平原」「大陸的ですな」といったぐあいにたくさん拾うことができます。長春から大連へむかう21時間もかかる車中で、「汽車は果漚しない平原を蹴つて南へとんでゆく」との気分になった生徒は、ある駅に着きそのプラットフォームに立つと、

「あれはなんですか？」と叮嚀に角灯〔ランタン〕の男にきいた。地平線に沿ふて白く明るんだ空が見える。まだ真夜中だのにと自分は思つた。/「夜が明けるんですよ」

「日本と違つて早いんで」と現地のひとから説明をうけた、午前3時ころのようすを書きとめています。果てしない平原、地平線、早い夜明け、といった「日本と違」う「大陸」感が感じとられてゆきます。この生徒はただ、この「大陸」感に感嘆してばかりいたのではないようすで、感傷がまさったのか、「はてしない大平原は黒い屍のように私の前に鎮まり返つてる」とも記しています。

なお、彼は、車内で「空気枕に倚つたまゝ「満韓ところどころ」を読むであつた」のです。この1918年の海外修学旅行からさかのぼること9年まえに、漱石のこの紀行が『朝日新聞』紙上で2か月にわたって連載されました。のちに同書が満洲旅行の携行ガイドとなつたようすがうかがえます。

感嘆と興奮の「大陸」感、それはまた 鳥瞰図風体感 ともいうべき情景のイメージでもありました。ときにパセティックな情趣もそこに入り込みます。この感覚は、満洲を離

れてどう想起されるのでしょうか。満洲の撫順から朝鮮の平壤へ。小樽高商一行は平壤で、名所、史跡をめぐる。「周囲の景色、亦、満洲の野の様に無趣味極まる単調な大平原ではない。其処には丘あり、川あり、所々小部落あり林もある。又時としては、清らかな川の流に洗濯して居る女や高粱畑の片隅を辿り行く驢馬の児等が目につく」という情景が描写されます。

海外修学旅行では、日本ではない、日本をこえた、日本ではみられない光景の代表として「大陸的」と形容される眺めがみられてゆきます。おそらく、小樽や札幌では感じられない「大陸」感を、ウラジオストクの埠頭や、南満洲鉄道の車中や駅のプラットフォームで「鳥瞰図風体感」として生徒たちは感じています。これが海外修学旅行の1つの大きな醍醐味でした。しかしそれも、朝鮮の、きっと、細やかな、と表現される景色との対比では、「無趣味極まる単調」さとして追いやられてしまうのです。山川草木、せせらぎや瀧、雨に霧、丘から峠への小道、とあげてゆけば、ああやっぱりニッポンはいい、という感慨までもう少しの距離です。「大陸」感の興奮が「無趣味極まる単調」へと変化するのに、大きな飛躍は必要としません。大平原にはない、清らかな川の流れがあればよいのです¹⁷⁾。

わたしが設定した高商の海外修学旅行というフィールドは、高商を構成する人びとの結び目として、また、高商に設けられたいくつもの装置や機能の結節として、高商史をめぐる方法になるとの見通しがあります。こうした方法を活用するには、すでにみたとおり、高商の資料というと「旧植民地関係資料」をあげてすませたようすから大きな資料の編成替えが必要となります。あわせて、断片としてある、かぎられた資料の読み方にもくふうが要ります。

もう1つ、海外修学旅行で得た高商生たちの情感について、たとえば、戦跡を見学した生徒たちが、その地に日清、日露の戦争による兵士たちの血と汗を想起して、そのとき強烈に帝国日本の一員であることを感じた、という指摘に大きな誤りはないでしょう。あるいは、高商生も渡航先で朝鮮や支那を、そこに生きる人びとを睥睨し、帝国国民としての

¹⁷⁾ 山口高商生のこうした情緒について前掲阿部「大陸に興奮する修学旅行」で論じた。

ふるまいを身につけていった、といわれれば、ひとまず、そうだ、となるでしょう。ただ、わたしは、こうした心性をめぐる歴史は、できるだけその機微をつかむことが大切だと考えています。たとえば、さきにみた 鳥瞰図風体感 は、ウラジオストクに立ち、目と耳でその「異国情緒と云ふものに富だ特殊のシーンを頭の中へ描せた」と感じた高商生が持ったもう1つの気分とつながっていました。それは、「田舎者の東京見物と云つたような落着がない、アブセントマインデットな雰囲気」が僕を取り巻いた」との観察にあらわれています。外国の地で自分を襲った気後れ、落ち着きのなさ、ぼんやりとした雰囲気を、彼は自己の「田舎者」性で説明します。こうした空虚な気分には、異質なものへの貶視、尊大な自意識、既存の心情や感情をなぞる反復の意識、わたしのいう 鳥瞰図風体感 や「大陸」感も入り込むことでしょう。だからといって、それが高商生たちにつねに強烈に自覚されたり、ずっと定着したりするわけではないでしょう。

わたしにとって、高商の歴史を考えるとということは、残ってきた、残されてきた歴史資料をうまいぐあいに整え、それを読むくふうにつとめ、できるだけ、整った歴史の記述を終えてよしとしない規律をみずからに課すこととなります。整除された歴史記述では、たとえば満洲についてあらわすときに、「大陸」感をうまくまとめられても、そこに「無趣味極まる単調」を書き入れることはむつかしくなるでしょう。もう1つ、わたしには、ナショナルリティの構成や機動を問うとの関心があり、この観点から歴史を考えると、たとえば高商生が執筆した論文に展開する論理よりも、彼らの紀行にあらわれた雰囲気を考える方がより適しているとおもいます。

小樽高商の海外修学旅行については、『緑丘』『校友会雑誌』、いわゆる卒業アルバム、地元紙の新聞報道が歴史資料となります。分量もそう多くはなく、内容も感想の断片が積み重なったほどとの観があります。こうしたとき、小樽高商の資料がどのように残っているのか、それをもとにたとえば海外修学旅行をどう組み立てられるのか、そのくふうを凝らしてみようとおもいます。

【附記】冒頭の脚注に記した「小樽商科大学の歴史へタイムスリップ」に出席して、高等

商業学校をそれがあある場所に　ここでは小樽に、きちんと位置づけ、それをさらに北海道に、そのうえになお、たとえば、ウラジオストクや清津や大連などをもふくめた場所において考えるという構想（framework）を教えられました。もう1つ、わたしたちの研究記録をも対象とする公文書管理法について知る機会ともなりました。たんに（歴史）資料の保存と公開についてのディスカッションにとどめずに、記録の管理をめぐる現状を知ることとは、わたしたち研究者がどういった時代や社会で仕事をする事となるのかをあらためて考えることとなりました。歴史研究者は、歴史を記すときに史料（歴史資料）を素材として活用します。そこでの分析や考察とはまたべつに、研究の素材となる史料それ自体を論じてもきました。いまはさらに、その研究者の仕事や業務についての文書をも史料化することとなるようで、こうなるともはやこの議論は、歴史学だの文系だのといっていられなくなります。研究にくわえて研究者自体も、その歴史化がはかられるのです。

最後にまたもう1つ知ったこと　小樽という場所を、そこに生まれ、そこで学んだひとによって、そのひとの記した作品によって、いくにんかのひとにみえるようにきちんとあらわそうとした強い意思がかつてあったこと、その情念がもう1つの、小樽高等商業学校から小樽商科大学への百年という歴史を、またいくにんかのひとにみえるようにきちんとあらわそうとするねばりにつながったこと、を知りました。もしセレモニーがなければ、あの3号館1階104講義室でいつまでも、伊藤整について説き、彼の『若い詩人の肖像』を誦^{そら}んじ、小樽商科大学史料展示室の展示を喜ぶ講話がいつまでも、教壇からはすかいの向きに唱えられたことでしょう。